まさば太平洋系群は、2004年、2007年、2009年と豊度の高い加入があり、2013年の資源量は136万トンである。親魚量から資源水準は低位と判断されるが、未成魚が増加しており、親魚量の増加が見込まれる。過去５年間（2009年～2013年）の資源量の推移から動向は増加と判断される。まさば対馬暖流系群の2013年の資源量は43万トンで、資源量と親魚量から資源水準は低位、過去５年間（2009年～2013年）の資源量の推移から動向は減少と判断される。ごまさば太平洋系群の2013年の資源量は79万トンで、漁獲量と資源量から資源水準は高位、過去５年間（2009年～2013年）の資源量の推移から動向は横ばいと判断される。ごまさば東シナ海系群の2013年の資源量は13万トンで、資源量から資源水準は中位、過去５年間（2009年～2013年）の資源量の推移から動向は増加と判断される。

まさば及びごまさばは、共に新規加入群の状況によって変動が大きいことから、資源動向について今後とも注視する必要がある。

⑹　するめいかの動向

我が国周辺水域のするめいかは、日本近海に広く分布し、季節により南北に大きく回遊するが、主に12月～３月に東シナ海で発生する冬季発生系群と、10月～12月に北陸沿岸域から東シナ海で発生する秋季発生系群とに大別される。

冬季発生系群の2014年の資源量は82万トンであり、資源尾数から資源水準は中位、過去５年間（2010年～2014年）の資源尾数の推移から動向は横ばいと判断される。秋季発生系群の2014年の資源量は235万トンと倍増し、過去最高を記録した。資源量から資源水準は高位、過去５年間（2010年～2014年）の資源量の推移から動向は横ばいと判断される。

当該資源は、海洋環境によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑺　ずわいがにの動向

我が国周辺水域のずわいがには、日本海大陸棚の縁辺部、大和堆、銚子以北の太平洋岸及びオホーツク海の水深150メートル～750メートルの範囲に分布し、生息域の分布によって、オホーツク海系群、太平洋北部系群、日本海系群及び北海道西部系群に分けられる。

この中で最も資源の大きな日本海系群は、富山県以西（Ａ海域）では1990年代後半から資源は回復傾向にあり、資源密度指数から資源水準は中位、過去５年間（2010年～2014年）の資源量の推移から動向は減少と判断される。新潟県以北（Ｂ海域）では、資源密度指数の５年移動平均から資源水準は高位、過去５年間（2009年～2013年）の資源量の推移から動向は減少と判断される。また、オホーツク海系群は、沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）から資源水準は低位、過去５年間（2010年～2014年）の分布密度の推移から動向は横ばい、太平洋北部系群は、資源量から資源水準は低位、過去５年間（2009年～2013年）の資源量の推移から動向は減少、北海道西部系群は、ずわいがにかご漁業のＣＰＵＥ（１かご当たりの漁獲量）から資源水準は高位、過去５年間（2009年～2013年）のＣＰＵＥの推移から動向は増加と判断される。

２　第２種特定海洋生物資源ごとの動向

⑴　日本海西部海域のあかがれいの動向

日本海西部海域（新潟県以西）のあかがれいは、当該海域の水深150メートル～900メートルの広範囲にわたり分布している。当該海域のあかがれいの漁獲量は、1990年代前半から増加して2000年前後は3,500トン前後であったが、2006年頃から再び増加し、2007年以降は5,000トン台で推移している。2013年の漁獲量は5,429トンであった。しかし、沖合底びき網漁業のみで5,000トン以上漁獲していた1980年代前半と比べると、沖合底びき網漁業の資源密度指数は低く、資源水準は中位、過去５年間（2009年～2013年）の沖合底びき網漁業の資源密度指数の推移から動向は横ばいと判断される。

⑵　宗谷海峡海域のいかなごの動向

宗谷海峡海域のいかなごは、当該海域の水深40メートル～80メートルに分布している。当該海域の近年のいかなご類の漁獲量は1995年の5.6万トンをピークに減少傾向にある。2013年の漁獲量は、1980年以降で最低であった2012年の3,151トンから増加し、7,020トンであった。

沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）の推移や近年の漁獲物体長組成などから、資源水準は低位、動向は減少と判断される。

⑶　太平洋北部海域のさめがれいの動向

太平洋北部海域のさめがれいは、当該海域の水深150メートル～1,000メートルの広範囲にわたり分布している。当該海域のさめがれいを主として漁獲する東北海区の沖合底びき網漁業による漁獲量は、1978年の6,329トンをピークに減少し、1998年には108トンとなった。その後、やや増加し、200トン台で推移していたが、2011年には東日本大震災の影響で118トンに減少し、2013年は197トンであった。

沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）の推移から、資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。

⑷　瀬戸内海海域のさわらの動向

瀬戸内海海域のさわらは、冬を紀伊水道以南の太平洋沿岸及び伊予灘・豊後水道域で過ごし、春には紀伊水道及び豊後水道を経て内海へ来遊し、秋に外海へ移出する。

瀬戸内海におけるさわらの漁獲量は、1986年の6,378トンをピークに減少し、1998年には199トンとなった。その後は徐々に増加し、2013年には1,782トンまで回復した。資源量も漁獲量の推移と同様の傾向を示しており、1998年には1987年以降で最低となる704トンであったが、その後回復し、2013年は4,926トンであった。

資源量から資源水準は低位、過去５年間（2009年～2013年）の資源尾数と資源量の推移から動向は増加と判断される。

⑸　伊勢湾・三河湾海域のとらふぐの動向

伊勢湾・三河湾海域のとらふぐ資源は、不定期に発生する卓越年級群の動向により大きく変動する。1999年及び2001年級群が卓越したことによって、2002年漁期の資源量は高い水準にあったが、2002年以降、卓越年級群の発生は確認されていない。2006年級群が比較的大きい規模で加入したことから2006年～2009年の漁獲量は200トン前後で安定的に推移したが、2010年～2012年級群の加入が近年の最低水準にとどまったため、2011年以降は100トンを下回る不漁が続いており、2013年の漁獲量は67トンと過去最低となった。

資源量の推移から、資源水準は低位、動向は減少と判断される。

⑹　日本海北部海域のまがれいの動向

日本海北部海域のまがれいは、当該海域の水深150メートル以浅に分布している。当該海域のまがれいの漁獲量は、1986年と1994年にピークが見られるものの、1998年にかけて半減し、その後も緩やかな減少傾向が続いている。2013年の漁獲量は、1993年以降の最低水準である2009年の225トン及び2010年の235トンに次ぐ240トンであった。

漁獲量の推移から資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。

⑺　周防灘海域のまこがれいの動向

周防灘海域のまこがれいは、当該海域の沿岸から沖合までの水深10メートル以深に生息している。当該海域のまこがれいの漁獲量が推定されている1980年以降の推移をみると、1980年の713トンをピークに減少を続け1993年に一時的に回復したものの、1994年から再び減少し、2004年には127トンまで減少したが、その後増加し、2006年は219トンとなったが、その後は再び減少している。

関係県の調査による小型底びき網標本船のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）及び推定漁獲量から、資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。